

勉強ノート：電磁気学

マクスウェルの方程式

マクスウェルの方程式は,

$$\operatorname{div} \mathbf{D} = \rho \iff \operatorname{div} \mathbf{E} = \frac{\rho}{\varepsilon_0} \quad \dots$$

$$\operatorname{div} \mathbf{B} = 0 \quad \dots$$

$$\operatorname{rot} \mathbf{E} = -\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t} \quad \dots$$

$$\operatorname{rot} \mathbf{H} = \mathbf{i} + \frac{\partial \mathbf{D}}{\partial t} \iff \frac{1}{\varepsilon_0} \operatorname{rot} \mathbf{B} = \frac{1}{\varepsilon_0 \mu_0} \mathbf{i} + \frac{1}{\mu_0} \frac{\partial \mathbf{E}}{\partial t} \quad \dots$$

である.

について

積分形のガウスの法則

$$\int_{S_0} \mathbf{E} \cdot \mathbf{n} dS = \frac{1}{\varepsilon_0} (Q_1 + Q_2 + \dots + Q_n)$$

を変形すると,

$$\int_{S_0} D_n dS = \int_V \rho(\mathbf{x}) d^3x$$

である. ガウスの発散定理を用いると,

$$\operatorname{div} \mathbf{D}(\mathbf{x}) = \int_V \rho(\mathbf{x})$$

となる. 時間発展する場合も,

$$\operatorname{div} \mathbf{D}(\mathbf{x}, t) = \int_V \rho(\mathbf{x}, t)$$

が成り立つ.

について

積分形の磁場に関するガウスの法則

$$\int_{S_0} B_n dS = 0$$

について、ガウスの発散定理を用いると、

$$\operatorname{div}\mathbf{B}(\mathbf{x}) = 0$$

となる。時間発展する場合も、

$$\operatorname{div}\mathbf{B}(\mathbf{x}, t) = 0$$

が成り立つ。

について

積分形のファラデーの電磁誘導の法則より、

$$\begin{aligned}\phi^{e.m.} &= \int_{C_0} \mathbf{E} d\mathbf{r} \\ &= -\frac{d\Phi}{dt} \\ &= -\frac{d}{dt} \int_S B_n dS\end{aligned}$$

である。微分形では、ストークスの定理より、

$$\operatorname{rot}\mathbf{E} = -\frac{\partial\mathbf{B}(\mathbf{x}, t)}{\partial t}$$

である。

について

積分形の電荷保存則より、

$$-\frac{dQ(t)}{dt} = \int_{S_0} i_n(\mathbf{x}, t) dS$$

である。微分形では、

$$-\frac{\partial\rho(\mathbf{x}, t)}{\partial t} = \operatorname{div}\mathbf{i}(\mathbf{x}, t)$$

となる。ここで、元の式が時間変動しても成り立つとすると、

$$\operatorname{div}\operatorname{rot}\mathbf{H}(\mathbf{x}, t) = \operatorname{div}\mathbf{i}(\mathbf{x}, t)$$

となり矛盾するので,

$$\begin{aligned}\operatorname{rot}\mathbf{H}(\mathbf{x}, t) &= \mathbf{i}(\mathbf{x}, t) + \frac{\partial\mathbf{D}(\mathbf{x}, t)}{\partial t} \\ \therefore \operatorname{div}\operatorname{rot}\mathbf{H}(\mathbf{x}, t) &= \operatorname{div}\mathbf{i}(\mathbf{x}, t) + \frac{\partial}{\partial t}\operatorname{div}\mathbf{D}(\mathbf{x}, t) \\ 0 &= \operatorname{div}\mathbf{i}(\mathbf{x}, t) + \frac{\partial\rho(\mathbf{x}, t)}{\partial t}\end{aligned}$$

静電場

静電場で成り立つ基本法則は,

$$\text{ガウスの法則} : \int_{S_0} D_n dS = \int_V \rho d^3x, \operatorname{div} \mathbf{D} = \rho$$

$$\text{無名の法則} : \int_{C_0} \mathbf{E} \cdot d\mathbf{r} = 0, \operatorname{rot} \mathbf{E} = 0$$

である.

静電場 \mathbf{E} の中に置かれた点電荷 q が受ける力は,

$$\mathbf{F} = q\mathbf{E}$$

静電場において, 電場は静電ポテンシャルを用いて,

$$\mathbf{E} = -\operatorname{grad}\phi$$

となる. これより,

$$\begin{aligned} \operatorname{div} \mathbf{E} &= -\operatorname{div} \operatorname{grad} \phi(\mathbf{x}) \\ &= -\Delta \phi(\mathbf{x}) \\ &= \frac{\rho(\mathbf{x})}{\varepsilon} \end{aligned}$$

なので, ポアソンの方程式

$$\Delta \phi(\mathbf{x}) = -\frac{\rho(\mathbf{x})}{\varepsilon_0}$$

で記述されることがわかる.

静磁場

静磁場で成り立つ基本法則は,

$$\text{ガウスの法則} : \int_{S_0} B_n dS = 0, \operatorname{div} \mathbf{B} = 0$$

$$\text{アンペールの法則} : \int_{C_0} \mathbf{H} \cdot d\mathbf{r} = I, \operatorname{rot} \mathbf{H} = \mathbf{i}$$

である.

導線内の定常電流のつくる磁場を求めるには,

$$\text{ビオ - サバールの法則} : d\mathbf{B} = \frac{\mu_0 I}{4\pi} \frac{d\mathbf{S} \times \mathbf{r}}{r^3}$$

を用いる.

静磁場において磁束密度はベクトルポテンシャルを用いて,

$$\mathbf{B}(\mathbf{x}) = \operatorname{rot} \mathbf{A}(\mathbf{x})$$

となる. これより,

$$\begin{aligned} \operatorname{div} \mathbf{B}(\mathbf{x}) &= \operatorname{div} \operatorname{rot} \mathbf{A}(\mathbf{x}) \\ &= 0 \end{aligned}$$

である.

電磁波の波動方程式

E について, $\nabla \times \mathbf{E} = -\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t}$ に $\nabla \times$ を作用させると,

$$\begin{aligned}\nabla \times \nabla \times \mathbf{E} &= -\nabla \times \frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t} \\ &= -\frac{\partial}{\partial t}(\nabla \times \mathbf{B}) \\ &= -\varepsilon_0 \mu_0 \frac{\partial^2}{\partial t^2} \mathbf{E} \\ \nabla \times \nabla \times \mathbf{E} &= \nabla(\nabla \cdot \mathbf{E}) - \nabla^2 \mathbf{E} \\ &= -\nabla^2 \mathbf{E}\end{aligned}$$

である. よって,

$$\begin{aligned}\frac{\partial^2}{\partial t^2} \mathbf{E} &= \frac{1}{\varepsilon_0 \mu_0} \nabla^2 \mathbf{E} \\ &= c^2 \nabla^2 \mathbf{E}\end{aligned}$$

である.

B についても同様に,

$$\begin{aligned}\frac{\partial^2}{\partial t^2} \mathbf{B} &= \frac{1}{\mu_0 \varepsilon_0} \nabla^2 \mathbf{B} \\ &= c^2 \nabla^2 \mathbf{B}\end{aligned}$$

である.

これらより, 真空中で電場と磁場は電磁波として伝わる.

電磁場のエネルギー

単位体積あたりの電磁場のエネルギー u は,

$$u = \frac{1}{2}\varepsilon_0\mathbf{E}^2 + \frac{1}{2}\frac{1}{\mu_0}\mathbf{B}^2$$

$$\left(= \frac{1}{2}\varepsilon_0\mathbf{E}^2 + \frac{1}{2}\mu_0\mathbf{H}^2 \right)$$

である。電磁波では、電場と磁場のエネルギーは同じ大きさである。

閉曲面 S 中の電磁場のエネルギー U について,

$$U = \int_V u dV$$

$$\frac{dU}{dt} = \frac{d}{dt} \int_V u dV$$

$$= \int_V \frac{\partial u}{\partial t} dV$$

$$= \int_V \left(\varepsilon_0 \mathbf{E} \frac{\partial \mathbf{E}}{\partial t} + \frac{1}{\mu_0} \frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t} \right) dV$$

$$= \int_V \left[\frac{1}{\mu_0} \mathbf{E} \cdot (\nabla \times \mathbf{B}) - \frac{1}{\mu_0} \mathbf{B} \cdot (\nabla \times \mathbf{E}) \right] dV$$

$$= -\frac{1}{\mu_0} \int_V \nabla \cdot (\mathbf{E} \times \mathbf{B}) dV$$

$$= -\int_S \frac{1}{\mu_0} (\mathbf{E} \times \mathbf{B} \cdot \mathbf{n}) dS$$

$$= -\int_S \mathbf{S} \cdot \mathbf{n} dS$$

である。 $\mathbf{S} (\equiv \frac{1}{\mu_0} \mathbf{E} \times \mathbf{B} (= \mathbf{E} \times \mathbf{H}))$ はポインティングベクトルと呼ばれ、エネルギーの流れの密度を表す。

インダクタンス

インダクタンスは、巻線などにおいて、電流の変化が誘導起電力となって現れる性質である。

自己誘導と自己インダクタンス

巻線を通る磁束が変化して流れる電流が変化すると、磁束の変化を打ち消す方向に誘導起電力が発生する。その大きさは、

$$e = -L \frac{dI}{dt} [V]$$

である。自己インダクタンスは、自己誘導の起こしやすさを示し、

$$L = N \frac{d\Phi}{dI} [H]$$

である。

相互誘導と相互インダクタンス

磁気的に結合された二つの巻線の一方の電流を変化させると、もう一方の巻線に誘導起電力を生じる。その大きさは、

$$e = -M \frac{dI}{dt}$$

である。相互インダクタンスは、次式

$$M = k \sqrt{L_1 L_2} \quad (k : \text{結合定数})$$

で表される。

コンデンサー

도체表面上の誘導電荷の分布を考えると,

$$E(\boldsymbol{x})\Delta S = \omega(\boldsymbol{x})\Delta S/\epsilon_0$$

より,

$$\omega(\boldsymbol{x}) = \epsilon_0 E(\boldsymbol{x})$$

である. これが電荷分布に関するクーロンの法則で, 誘導電荷の面密度 ω を知ることができる.

コンデンサーは誘電体によって分離された二枚の電極, 電極板によって構成される.

도체間の電位差を 1V 上昇させるのに要する電荷量を静電容量とする. 単位は F (ファラッド) ($= C / V$) である. つまり,

$$C = \frac{Q}{V}$$

である.

一方の極板から他方に微小電荷を運ぶことによって, 両極板上の電荷を $\pm Q$ にするとき, 外から与える仕事は,

$$\begin{aligned} W &= \frac{1}{C} \int_0^Q q dq \\ &= \frac{1}{2} \frac{Q^2}{C} \end{aligned}$$

である. この仕事 W は, コンデンサーの内部に静電エネルギー (静電場エネルギー) として蓄えられ,

$$\begin{aligned} U_e &= \frac{1}{2} \frac{Q^2}{C} \\ &= \frac{1}{2} C V^2 \\ &= \frac{1}{2} Q V \end{aligned}$$

である.

電場 E が時間的に変動するより一般的な場合を考えると、平行板コンデンサーの場合を考えると、 $E = \frac{\omega}{\epsilon} = \frac{Q}{\epsilon_0 S}$ より、

$$\begin{aligned} U_e &= \frac{1}{2} \frac{d}{\epsilon_0 S} (\epsilon_0 S E)^2 \\ &= \frac{1}{2} \epsilon_0 E^2 (dS) \\ &= \frac{1}{2} \epsilon_0 E^2 v \end{aligned}$$

である。静電場 E が一様ではなく、場所の関数であるとき、

$$U_e = \frac{1}{2} \epsilon_0 \int_V \mathbf{E}^2(x, y, z) d^3x$$

である。